

徹底したコスト管理と従業員の意識向上による、たゆみない経営努力で原油価格高騰に対処。理念は「正直」。

株式会社 坂東島運輸（肝属支部）

国政、県政とのパイプ役として地元業界を牽引する父、緻密な経営管理に徹する息子。二人三脚によって実現してきた堅実な事業展開と地域社会への貢献。

坂東島運輸の創業は昭和44年。昭和30年代後半から養豚業を営んでいた坂東島繁藤会長が、生きた豚や枝肉などを輸送するために鹿屋市の運送業者の事業を引き継いだのがその始まり。およそ1年後の昭和45年頃には、毎日1車、120頭の豚を東京へ運ぶまでになった。当時、生きた豚を鹿児島から東京へ輸送するためには、国鉄の貨車を利用すると4日間かかっていたが、坂東島運輸のトラック便は、22、3時間ほどで元気な豚を東京の市場に届けることを可能にした。

「コンビニもドライブインも無い時代、二人一組のドライバーに握り飯と水筒を持たせて送り出したものです」と坂東島会長は当時の苦労を振り返る。地回りと言われる一般道の走行が多かったため、ドライバーの負担のみならずトラックの劣化も早く、豚を安定し

た状態で輸送するため2年おきに新車に買い替える必要もあった。ある時には、大型台風の影響で首都圏へ走るトラック便が全便ストップした中、坂東島運輸の車だけが危険を顧みず走り続け、都民の食生活に貢献したという武勇伝もある。その功績により厚生大臣表彰を受けたというから、南九州発の畜産物がいかに首都圏の胃袋を支えてきたか窺える。

昭和54年には長男の坂東島和久氏が事業に参画。平成16年、社長を継承した。「鹿児島に帰ってきた後の平成5年にバブル崩壊、社長を引き継いだ3年前からは原油高騰、といつも苦しい時期にお鉢がまわってくるんです」と苦笑する和久氏は、高速料金、燃料費など無駄な経費の削減や車両の管理保全など、細かい管理を徹底する経営方針を採っている。GPSの導入によって車両の所在地、アイドリ



飼料・畜産物輸送が主力の車両



株式会社 坂東島運輸

本社／鹿屋市串良町有里6143-3
代表取締役会長／坂東島繁藤
代表取締役社長／坂東島和久
従業員数／36名
保有車両／51台



代表取締役会長 坂東島繁藤さん 代表取締役社長 坂東島和久さん

Top Runner トップランナー

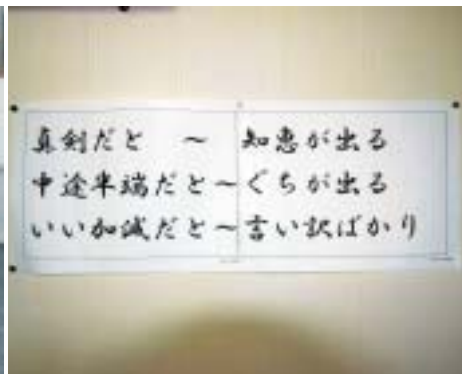
ング、スピード違反など細かい車両管理も徹底。また、牛や豚、鶏などの生き物に対しては病気予防の徹底も求められるため、とくに感染症の流行時には、ドライバーに消毒薬の携帯を義務づけるなど、衛生管理を徹底している。自らもドライバーとしての経験があるだけに、管理される辛さはだれより理解できる。「でも、きついことをやらないと生き残れない時代。真剣に考えたら、従業員も社長も同じ考えが出来ます。社員一人ひとりが営業マンだと自覚して、次につながる仕事をしてほしい」と語る。事務所に掲げる「真剣だったら知恵が出る。中途半端だったらぐちが出る。いい加減だと言いつばかり」のキャッチフレーズには、和久氏の思いが凝縮されている。大切にしている理念は「正直」。ミスを行ったらその場で正直に伝えて謝ることが、次へ

つながる信頼関係を築くという。そのためにも会社の規模は拡大せず、目の届く範囲での堅実経営を守る考えだ。そのほか、地域の行事に積極的に参加し、近隣の農家の農機具が不調だったらすぐに駆けつけて無償で修理するなど、地域への貢献には常に心を砕いている。

「めまぐるしい今の時代、我々の時代の成功例はもう語れない。わが息子ながら、時代によく対応して頑張っていると思います」。県ト協の理事、肝属支部支部長、飼料・畜産輸送部会長ほか数々の役職を務め、業界のリーダーとして、また行政とのパイプ役として多忙な繁藤会長は、社内業務は和久氏に一任。きびしい環境におかれたトラック業界の代表者として健闘する日々である。



常に事務所や乗務員の防疫対策を実施



事務所に掲げられているキャッチフレーズ



本 社 事 務 所